

【書評】

ジャック・ラクルシエール著
『ケベックの歴史』
小倉和子・小松祐子・古地順一郎・伊達聖伸・矢内琴江訳
水声社、2023年

Jacques Lacoursière, *Une histoire du Québec*
racontée par Jacques Lacoursière,
Les éditions du Septentrion, 2002 (sixième tirage, 2014)

佐々木菜緒
SASAKI Nao

「歴史」を意味するフランス語の « histoire » には、周知の通り、「物語」の意味合いもある。そのことは、歴史と物語は表裏一体であり、物語が語られるものであるとすれば、歴史は物語するという行為をたらしめる人々の声の集合体であることを表している。歴史とは単に年表のように線形的に並べられた事実の羅列ではなく、複数の声および物語が重層的に織りなされる情念的かつ創造的空間だといえる。哲学者の野家啓一のことばを借りれば、「歴史は超越的視点から〈俯瞰〉されるものではなく、あくまでもそこに内属して生きる人々によって〈物語られる〉べきもの」(野家、2005、p. 136)である。事実ありきではなく、様々な人間関係・因果関係や文脈の中で生まれた出来事をどのように語るかということが肝要なのであり、この点において、歴史は諸物語の変奏でできているといえるだろう。

本書は、そのようなさまざまな物語の変奏群としての歴史像が基盤にあるように思われる。原題の「ジャック・ラクルシエールによって語られた、ケベックの一つの歴史」(p. 235)から分かるように、同書は一人の語り手自身の視点で「語られたもの」である。そこからは、固定化されたものとしてではなく、生成と変化を続けていくものとしての歴史の在り方が感じられる。実際、この書の特徴は、信書や報告書、記事や声明文といった媒体を通じて、各出来事に携わった人々の声を中心に展開しているところにある。読み進める中で読者の脳裏に浮かんでくるのは、苦悩や葛藤、遺憾や憤慨、喜々や満悦などの様々な感情が渦めく空間としてのケベック史の姿である。さらに、この

歴史＝物語の魅力はその語りにもある。複雑な事象を軽快な調子で一文一句に引っ括めてしまうその技は、いわば物語る者としての著者の魅力を存分に表現している。以下、全11章を通じて語られていくケベック史およびその語りの魅力を紹介していきたい。

第1章「かなりつらい初期」はジャック・カルティエの登場からモンレアルの建設に至るまでの商人や入植者たちの試練が語られる。毛皮交易をめぐる事象が彼らの試練の主な源である。交易所の設置とその取り合い、先住民との友好または敵対関係など、様々な思惑が交錯する空間としてケベック史は演出される。そうして、ケベックの地理的な重要性が表現されているように思われる。他方、これらの試練がヨーロッパ人の一方的な土地の領有に端を発していることを語り手は最初に喚起する。「遠来者は平気で嘘をつく」(p. 16) と。

第2章「王立植民地」では、フランス国王の直轄地として「巨大な帝国の中心となる」ケベックの変容が語られる。新大陸のフランス化が推し進められる一方で、マリー・ド・レンカルナシオンの「フランス人が〈先住民〉になるほうが、その反対より簡単だった」(p. 34) との証言は、「王立」ということばがもつ高貴さとはほど遠い実態を露わにする。また、常にイロクォイや英国、あるいはニューイングランドなどの複数の敵に挟まれて、苦心惨憺するヌーヴェル・フランスの姿が浮き彫りになる。

第3章「一つの民が誕生した」は同書の中で最も胸が躍る物語の一つだろう。カナダの土地に暮らす人々の様子、生活様式、食文化、娯楽、福祉施設、教育事情、言語状況といった日常生活に関わる事象が、まさに彼ら自身の声を通して語られているために、彼らの息吹をふんだんに感じることができる。

次の第4章「容赦ない征服へ」が（後述の第11章と並んで）同書中、最も紙面が割かれている章であるのは、それだけケベック史の重要な転換点だからだろうか。前半では、ニューイングランドの攻撃に備えてケベックとモンレアルの要塞化が進められる傍ら、毛皮交易に代わる新たな産業資源の発掘と頓挫の顛末が語られる。例えば銅山の開発難や溶鉄所の経営難、林業や造船産業の発展など。その中で、中国への輸出用として注目されたオタネニンジン栽培に関しては、「手早く儲けたいという欲望が、金の卵を産むガチョウを殺してしまうことがある」(p. 59) 例として語られており、興味深い。そして後半では、ケベックにとっての征服戦争の経緯が話題の中心である。ただ、戦争の行く末よりも、英仏双方の戦法や兵士の質の違い、戦争中の食事情な

どが話題の中心となっているように、歴史に内属する人々の生き様を絶えず感じさせる記述となっている。

第5章「困難な共存」では、有名なケベック法の制定から王党派の到来、そして植民地の分割までの出来事が語られる。印象的なのは、イギリス人とアメリカ人が各々の思惑からカナダ人を味方につけようと呼びかける様子が、まるでラブコールのようであることだ。ケベック史上これほどカナダ人が売れっ子になった時期はないのではないかと思わずにいられず、その物語に引き込まれる。他方、王党派のもたらした「議会主義」の観点から、英仏の対立関係を解き明かしていく過程は知的好奇心をくすぐる叙述である。

第6章「対立に向かう歩み」では、1837-38年の叛乱とダラム報告書を経て、連合カナダとして再統合されるまでの間、英仏の民族間の緊張関係がどのように言語面、精神面、政治面、経済面で深まっていったかが語られる。注意をひくのは、人々の声が、以前は主に政治家や貴族、軍人、聖職者たちの信書を通じて聞こえてくるのに対して、この時期から新たな情報媒体である新聞を介して聞こえてくることである。声の質がより集団的で大衆的なものになっているといえる。例えば、ロワー・カナダにおける植民地政府への不満を表明するために輸入品のボイコットが起これ、反対に密輸品が重宝された現象について、語り手は次のような調子でまとめる。「したがって、スローガンは「密輸品を買おう！」である」(p. 109)。

第7章「新憲法に向けて」は、英仏の対立を包含しうるような政体として連邦制を設置するまでの道のりを語っているが、ケベック(カナダ)の歴史とはなんと苦難の連続なのだろうと感じ入れずにはいられない章である。首都の場所が繰り返し問題となり、先の叛乱の補償は誰が払うのか、米国の南北戦争時の防衛は誰が担うのかといった議論が起き、そもそも統合の是非を問う論争が絶えない。そのような物語の最大の魅力は、統合に対する植民地側と本国イギリス側の熱気の差にあるだろう。「連邦結成は、2、3の小教区の提携ぐらいにしか扱われていなかった」(p. 131) ために、いとも容易く裁可されたのである。

第8章「独特な州」で語られるのは、「19世紀後半のケベック州は、内向きで閉じていたわけではな [く]」(p. 141)、さまざまな思想や理念が政党や団体組織などで具体化されつづけており、非常に活発であったことだ。政治の舞台は、連邦政府やイギリス議会の決定事項を受け入れるような上意下達の体制が浸透していた教会とは違って、自由党やナショナル党などの登場に

彩られ、それぞれの思想と理念に基づいた社会構想が議論される場として活気を帯びている。他方で印象深いのは、カトリックのアイランド人聖職者たちがフランス語系住民の英語化の一端を担っていたように、ケベック史における彼らアイランド系の存在感と影響力である。

第9章「あらゆる戦線で」においても、複数の政党や団体が、2つの世界大戦の影響を受ける中で引き続き活発に設立されていく様子が語られる。周知の徴兵問題のほかに、カナダで2番目に豊かなケベック州の経済問題の統制の如何が問われはじめる。その回答として、リオネル・グルー神父が「フランス的(な)」(p. 162; p. 165) 国の存在を謳ったことに対して、語り手は「ここまで来れば、ケベック州が連邦に所属することに対して疑問を発するようになるのは、あと一步にすぎない」(p. 162) という。新たな重要な転換点の到来を予告する心地よい語りである。他方、大戦間に首相を務めたアデラル・ゴドブーの自由党政権に関する叙述は知的好奇心を刺激する。同政権はしばしばモーリス・デュプレシ政権と後のジャン・ルサーージュ政権の陰に隠れてしまいがちであるが、社会福祉に関わる進歩的な諸施策を講じるなど、小さな「静かな革命」を起こしていたのである。

第10章「新しい社会の誕生」は、1940年代のユニオン・ナショナル党政権から、自由党政権や10月危機を経て、1970年代後半のケベック党政権までのケベック社会の移り変わりを語る。その移り変わりの中で絶えず議論の中心にあるのは、一つの国としてのケベック州像である。ただ、「大いなる暗黒」の刻印をおされるデュプレシ政権が、教会や連邦政府、労働組合などしばしば対立し、権威主義的な政治を行ったものの、州独自の旗を作ることを働きかけ、「彼がなくなった時、ケベック州の公債はほとんどなくなっていた」(p. 182) ことは重要な記述である。後に「決断の時は来た！」(p. 197) と雄叫びをあげることができた背景には、意図せずデュプレシ政権の下準備があったということだ。

最後の第11章「対決の時代」は、ケベック党政権の誕生とフランス語憲章の制定によって幕開けられる。その舞台は、カナダとケベックそれぞれの立場について、連邦首相とケベック州首相との間で繰り返される応酬の物語のようだ。ただ、1995年の州民投票の敗因として、「『生粋の』ケベコワの民族票を強調したため」(p. 210) だと語られているように、ケベックの対決相手とはもはや連邦政府という一枚岩の相手ではなく、社会内部に様々な他者を含んだケベック州自身なのだろう。そのように示唆に富む終盤となっている。

る。

以上のように、『ケベックの歴史』の特徴は、歴史の当事者自身の声を通して、一般にはあまり語られない歴史の情緒的側面が備わっているところにある。史実に関する情報や知識の量といった横の広がりよりも、奥ゆきが備わっている。それゆえに、前提知識がないと分かりにくいと感じられる箇所がないわけではない。しかし、邦訳としての同書の魅力の一つは、その滑らかな訳文はもちろんのこと、人名や用語などへのきめ細やかな訳注や、巻末には索引が付されていることである。また、しばしば感嘆符が使われているように、情緒的な面は文体にもあらわれている。欲をいえば、もう少し多様な語調が加わることによって、そのように文体が醸し出している感情面をより贅沢に味わえられたであろう。いずれにせよ、ケベック史について既知の者にとってはこれまであまり味わったことのない歴史空間を堪能することができ、またケベック史を初めて知る者にとっては素晴らしい入門書になるだろう。

(ささき なお 白百合女子大学非常勤講師)

参考文献

野家啓一 (2005) 『物語の哲学』 岩波現代文庫。